

教育における「幸福」をめぐる語りの創出にかかわる萌芽的研究
A Study concerning a Creation of a Discourse on “Happiness” in Education

研究代表者 菊澤 聖子 (D2) 教員 鈴木 晶子
研究分担者 高橋 洋一 (D3) 須賀 みな子 (D1)

〔研究目的〕

昨今、教育に関わる様々な場面で「いのちの教育」の重要性が唱えられ、様々な試みが行われたり、議論されたりしている。このような社会状況の背後には、子どもたちが「生き生きとしていない」ことや「生きる意味を見いだせない」ことが問題として取り上げられ、これに対応できるような教育の必要性が高まってきていることがある。

本研究はこのような状況を踏まえ、教育学の立場から「死生」をどのように語ることができるのかという問題をめぐり、その背後にある幸福観を問い直すことも含めて、今一度再考しようとするものである。死生や幸福をめぐる問題は、「不幸」や「リスク」が少なければ少ないほど「幸福」であるというような単純な仕方では捉えられないのではないかという問題意識に基づき、死生や幸福に関わる様々な言説を、人間が生まれ、変容し、そして死んでいくという、最も広義での教育の営みにかかわるものとして捉え、その文化的・歴史的条件のもとに分析し、その語りの限界と可能性について考察することを目的とする。特にテキスト分析、語り分析によって、1) 思想史的背景を踏まえた上での「死生」への問い、2) 医療における「幸福感」の「健康」との関係性、3) 「大人」と「子ども」の関わりに見る「幸福」、という三つの観点からのアプローチを試みる。

〔研究経過〕

毎回ゼミ形式で、本研究メンバー及びゼミへの参加者で、死生や幸福に関連するテキストをもとに、報告、議論を行った。テキストとしては、前期は、ギリシャ哲学とキリスト教神学をヨーロッパ思想における大きな二つの流れと捉え、そこに見られる幸福観を概観した上で、無教会派のキリスト者としての立場から自身の幸福観について論じられた、三谷隆正の『幸福論』（岩波文庫、初版 1944 年）を取り上げた。後期は、2008

年より順次公刊されている『死生学』（全5巻、島蘭進・竹内整一、小佐野重利 責任編集、東京大学出版会）を主なテキストとして、そこに収められている論文を取り上げ、参加者の研究関心と関連づけた形で死生や幸福をめぐる考察の報告会を行った。

〔研究成果〕

1) 生きること、死ぬことへの問いの起点（菊澤聖子）

近年「いのちの教育」と絡んでしばしば問われる「なぜ生きるのか」、「何のために生きるのか」という問いの背後にある思考様式をめぐって、西洋の伝統的な幸福観をふまえて考察した。この問いは、一つには、主体が理由や目的に依拠し、それらとの関連であらゆる行為を組織化していくという見方に基づくものであると考えられる。しかし、「生きる」ということを、「自発」でも「受身」でもあるような意味で「すでに生まれてしまっている」ということを考えあわせると、生や死は「なぜ生きるのか」、「何のために生きるのか」という問いの枠組みに必ずしも還元されるようなものではなく、今生きているということが、すでに「目的」であり「完全性」であるようなものとしても考えることができるのではないかということを明らかにした。

2) 幸福と健康 ―医療における幸福感をめぐって（高橋洋一）

医療において近年特に注目されている QOL (Quality of Life) にみられる幸福感について、健康／病といったこれまで医療と深くかかわってきた概念との関係に注目することから考察した。QOL の概念が医療において普及することで、これまでほとんど問われることのなかった患者の満足感、あるいは幸福感が重視されるようになった。だが、医療において幸福の概念は健康／病の概念と「健康＝幸福、病＝不幸」といった関係にあるものとして理解されている。しかし、病にあっても折り合いを付けていくことができるといったように、従来の固定的な枠組みにおける幸福感の理解からは見出すことができない、与えられた状況で「なんとかやっていく」という知恵の観点から幸福感について考える可能性を提示した。

3) 「幸福」をめぐる「子ども」の諸相（須賀みな子）

妊娠・出産・育児に関わる現代の様々な言説を中心に分析することを通して、「子ども」と「幸福」の結びつきを「近代（教育学）の産物」とであると一蹴することのできる現代にあっても、その結びつきはますます強化されているということが明らかとなった。しかし、それらの言説において「子ども」と「幸福」とが結びつけられることが一つのからくりに見えたとしてもなお、子どもの見せる振る舞いに幸福を感じるのはなぜなのかということについて、大人が子どもに対して距離をとって感覚するというような、大人と子どもの間の境界線を強化する「幸福」ではなく、大人と子どもとが関わり合いながら繰り広げられる日常生活のなかで、その場を共有するというような、子どもと大人という境界線を無化し、つなぐものとしての「幸福」の可能性を明らかにした。